

---

# 一匹狼

原木野徹也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一匹狼

### 【Zコード】

Z8822D

### 【作者名】

原木野徹也

### 【あらすじ】

「一匹狼のもうひとつ意味、知ってるか?」リボーンの言葉から綱吉はその答えを見つけることになった。リボーンの意味ありげな言葉、いつもと少し様子の違つ雲雀、そこから導き出される答えとは!?BL要素は薄いですが、ヒバツナ要素を含みます。ご注意ください。

(前書き)

最初に言つておきます。

私はリボーン=B-レだと思つている節があります。（オイ）  
もちろん、この作品も例外ではありません。

もう一つ言つておけば、私はリボーン=Bバツナだとも思つています。

もちろんこの作品もヒバツナです。要素は薄めですが（たぶん）、  
苦手な方は「注意ください」ちなみに、ヒバツナです。

無駄に長いですが、じばじのお付き合ごを。

「また群れてる。……咬み殺すよ」

授業中の校舎裏。いつものように学校内の見回りをしていた雲雀はさつそく群れている奴らを見つけた。

彼にとつては疎むべき存在である弱い奴ら。

周りと群れるということは弱い証拠だ。本当に強い奴ならば群れなくとも生きていける。

現に雲雀はいつも一人でいたし、群れたいと思ったことなど一度もない。

……ない、はずだったのだ。

口もとにはねた赤い血を拭う。

校庭の前の、すっかり青くなつた桜並木を歩きながらふと顔を上げる。

南側の、校庭に面した普通教室。その三階。  
二年生の教室棟。

目線の先、真っ直ぐ。  
見える、横顔。

つまらなそうに机に肘をついて、頭を伏せて、ほとんど無意識のうちにペンをくるくる動かしている。

つん、と立った、けれどフワフワとした栗色の髪が窓から流れ込む僅かな風に揺れる。

時折気だるそうにため息をつき、ついとおしゃれに首筋の汗をぬぐつた。

じつと見つめ続けて、その顔がいつでもどんな細かいところまでも思い出せるほどになるまで見続けて、雲雀はようやく視線をそらした。

何事もなかつたかのような顔をして、実際はかなり動搖していた。

何をやつているんだ、僕は。

何をするにもなくそこから立ち去る。

そんな彼を見下ろす小さな影が、ニッと笑った。

「一匹狼つて知つてるか？」

家での勉強会。

いつものように唐突に、綱吉の家庭教師、リボーンが言った。

今日は、明後日から行われる中間テストの勉強のために、獄寺と山本も彼の家に来ている。

教えるのはもちろん獄寺で、綱吉と山本は獄寺の講義を聴きながら、ハテナをいっぱい飛ばしていた。

それでも必死に理解しようと綱吉がノートと格闘していた時、どこからともなくリボーンがやってきて、言つたのだ。

「一匹狼？」

「確かに……、集団の力に頼らずに、自分の力だけで行動する奴のことを表す時に使う言葉、つスよね」

「獄寺つて何でも知つてんのなー」

綱吉がリボーンの言葉を繰り返し、獄寺が辞書にでも乗つていそうな一般的な説明をし、山本がそれに対しての率直な感想を笑いながら言つた。

「でも、何かそれつて雲雀さんみたいだね。ほら、いつも一人でいるし、群れるの嫌いだし」

「確かにー。この間も『群れるのは弱いからだ』とか言つてたし」

「そう思うが、ツナ」

「え？」

雲雀についての見解で盛り上がりつとしていた綱吉ら三人に、リ

ボーンは言つ。

「獄寺のは一般的な見解だな。だが、ほかにも」の言葉には意味があるんだぞ」

リボーンは綱吉の疑問符を無視して続けた。

「そりなの？」 「そりなんですか？」 「なんでも知つてんのなー、小僧」

綱吉と獄寺が同じ内容の言葉を発し、山本は先ほどと全く同じ言葉を主語を変えて言つた。

「そりだぞ。あまり知られてねーがな」「なんなの、それ？」

次々に訊いてくる綱吉に、ちょっとは自分で考へろ、と言つたりボーンはテーブルの上に飛び乗る。

その周りを三人が囲んだ。

「狼つてのは、もともと群れで暮らす生き物なんだぞ。少ないとさは一頭ほどだが、多いときは二十頭くらいで群れをなす」

リボーンの豆知識講座に、綱吉と山本はふーん、へえー、と感心する。獄寺はもともと知っていたのか、ふんふん、と相槌を打つだけだ。

「一匹狼つてのは群れを離れて一頭だけで生きている狼の姿から来てるんだけどな。まあその理由はいろいろあるんだろうが」「で？」

「ちよつ、リボーン? 教えてくれるんぢやないのかよ!」  
「世の中そんなに甘いわけねーだら。自分で考ふる。ほひ、さつと宿題終わらせろ」

「ちよつ、リボーン? 教えてくれるんぢやないのかよ!」  
「世の中そんなに甘いわけねーだら。自分で考ふる。ほひ、さつと宿題終わらせろ」

やうに纏つて綱吉の背中に回ると、かしこと小さな足で綱吉をけり上げる。

その小さな足のどこかでそんな力があるのが、シナは顔をゆがめて、

いだつと飛び上った。

「まあ、案外シナの思つた通りかもしらねーぞ。調べてみる。これは家庭教師からの宿題な」  
「ええ! ? もー、これ以上やめじと増やせなこでー。トストだけで手こつけばいいだつて」「期限は明日だぞ。やつこいねーと……」

途中で意味あつげに言葉をとりひき、小さな鞄の中に小さな手を入れる。

その様子を見て、綱吉は「ひこつ」と後ずついた。

「わ、わかったよー。やつこいねーと……」

両手を前につけだし、ぶんぶんと手首を回してリボーンの行動を止めた。

リボーンに何か言われたら、それを実行せざるを得ないのだ。  
それ以外の選択肢は、綱吉は持ち合わせていない。

「えーっと。生物図鑑は……………」

テスト前日の放課後、結構な数の生徒が残る図書室で綱吉は一人だけ勉強外のことをしていた。

リボーンに言われた宿題をこなそうと、狼について調べようとしているのだ。それに、テストははなから諦めている。  
どれだけ勉強しても、どれだけ獄寺のわかりやすい（らしい）説明を聞いても、理解することができない。  
それならば命の安全を確保した方がいい。

（……でも）

重たい図鑑を腕に持ちながら、はあ、とため息をつく。

（考えても分かるわけないよなー）

どさつ、つと机に図鑑を放り出し、どかっと席に座り、ペラペラとまづは「一匹狼」の載つていそうな辞書を調べる。ことわざ辞典には載つておらず、次に国語辞典を見てみる。

「一匹狼……、一匹狼……、あつた」

小さく「一匹狼」と書かれたページを見つけ、その文字の横を指でたどりながら小さな声で読みあげる。

「えっと……、『群れを離れて一匹だけで行動する狼の意から、組織の力に頼らず自分の力だけで行動する人』、か……。なんだ、これしかないじやん。しかも獄寺君の言つてたのと意味一緒だし」

類づえをついて、またため息をついた。

「辞書にも載つていないのに、分かるわけないよ。つたぐ、リボンはいつも無茶ばかり言つんだから」

（せめて、獄寺君か山本がいてくれたら一緒に考えててくれたんだろうけど）

あいにく山本はテスト前だというのに部活、獄寺は最初手伝ってくれようとしていたが、リボーンに手伝つんじゃねえと止められた。あくまでも、ツナが考えなければならないのだと。

そんなわけで現在、校門前で苛々と待つことだらう。隣に居ては、どうしても助けを求めてしまつ。

いく度もため息をつきながら、今度は生物図鑑のページをめぐり、狼について調べ始める。

「狼はー……つと。あ、あつた、あつた」

狼についての記事も見つけ、先ほどと同じように指でたどりながら、関係のありそうなところを見つけて読みあげる。

「……『2~20頭で群れを作る』。リボーンが言つてたやつか。

それから……『縄張り意識が強く、縄張り外から来た狼は追い出される』のか…。『群れは繁殖ペアの子孫や兄弟など血縁関係のものが多い』……、『他の群れを出た個体が混ざる』こともある

と

そこまでほとんどの空になりながら読んで、少し気にかかった。

「縄張り意識が強くて追い出したりするのに、なんでほかの個体が混ざるんだ?」

そこまでじしくもなく思いついたはいいものの、そこから先の考えは導き出すことができない。

頭上にハテナをいっぱい飛ばしながら、じいっと辞書を見て考える。が、分からない。

「う、――……?」

(あーもう。わかんないよー。第一、一日で調べて考えうつて方が無理なんだ)

もんもんと考え込んでいたら、唐突に鐘が鳴った。まつとして顔を上げる。

どうやら、最終下校を続ける鐘だったようだ。見回せば図書室に残っているのは綱吉ただ一人。

「やばい……!」

がたつと席を立ちあがつて、たくさんの本を抱え本棚へと急ぐ。もとの位置を探し出し、急いで本をしまう。が、どうにも記憶があいまいで、背表紙に貼られている数字の意味も分からず、見つけ

出すのにかなり時間がかかった。  
そしてようやく最後の一冊。

「あ、アレ?」

入らない。

何度も何度も入れよつとする。が、やはり入らない。

書棚は高く、さらに隙間もほとんどなかつた。

高さは、背伸びをすれば何とか届くのだが、それも片手を精いっぱい伸ばしたときだけ。しかもその指さきだけである。

取りだす時は何とかひっぱりだすことができたが、押し込むには少し力が足りない。

そつときはもう少し余裕があつた気がするんだけど……。

足やら手やら、全身をフルフルと震わせて背伸びをしながら、必死で図鑑を押し込めよつとする。

どうやら先ほどまで図書室にいた生徒のうちの誰かが、この書棚に本を入れて行つたらしく。それが本来ここに分類されるべき本なのかは分からぬが。

(ああもううしょう。もう口が暮れてきてるのに……)

綱吉の思つとおり、白いぐもりガラスからはオレンジ色の光が淡く差し込んでくる。椅子や机や書棚の影が長く黒く伸びていた。

本をしまわなければいけないと必死になつてゐる綱吉は、本を一段下の棚にしまつた。や、椅子を持つてくるところことが思いつかないらしい。

「なにしたの？」

不意に、背後から声がかかった。  
急なことに綱吉はえ？と振り向き、それがだれか認めたとたん  
ひいっ、と短く悲鳴をあげた。

「ひひひひひひひ、雲雀さんっ！」

「とうくに最終下校は過ぎてるんだけど」

顔を責められた後ずたる綱吉を雲雀は鋭い眼で睨みつけた。  
それによつてまた綱吉は縮みあがつた。

「す、すみません！」「みんなそこー！でもあの、……入らなくて。  
スマセンー！」

「へへへ」と腰を折り曲げて何度も頭を下げて、少しでも被害を避けようと本を前に差し出した。

フルフルと震えて何をされるのかと怯えている綱吉の手から、雲雀はその本を抜き取る。

急に手の中から重みがなくなり、綱吉は不思議そうに顔をあげた。見れば雲雀は、その本を珍しそうに眺めていた。

「ひ…、雲雀さん？」

「生物図鑑……」

綱吉の呼び掛けには答えず、雲雀はその本の題名を読みあげた。  
そして先ほど綱吉が必死になつて手を伸ばしていた書棚へと、手を伸ばした。

「…………」

やつしながら、綱吉の方は向かずこやつ尋ねる。

「あ…ひ、は、ハイ…セイで、いいと思ひます」

雲雀の行動の意図が分からぬまま、綱吉は慌てて答える。

先ほどまで、あれほど書棚に収まるのを拒んでいた生物図鑑は、雲雀の手によつて何の抵抗もなくしまい込まれた。

その様子を呆気にとられながら見ていた綱吉は、雲雀の顔がこちらに向くのを見て急にほつとなつた。

何故咬み殺されないのか、何故手伝ってくれたのか、疑問は残るが、とりあえず礼を言わなければならぬ。

「あ…、あのひ、あああありがとひ、『やれこます』

慌てて頭をさげ、多少突つかかりながらも言い切る。

「君を」「はい?」

そんな綱吉の必死の礼には田もくれず、雲雀は急に綱吉に話しかけた。

あまりにも唐突なことだつたので、綱吉は思わず素つ頓狂な声をあげてしまつ。

が、それもまた氣にすることなく、雲雀は続ける。

「HR終わつてからずっとじりじりいたみたいだけど、何調べてたの

内容は、そんな質問だった。疑問符は付いていないが、そうなのだろ？。

（勉強してた、とは思わないんだ……）

綱吉は一瞬そう思い、生物図鑑見てたんだから勉強とは思わないか、とちぐに思い直す。

誤魔化すこともないだろ？と思いつつ、素直に話すことにする。

「え、えっと、その、リボーンに言われて、調べないと……、って」

やはり何度か言葉に突っかかりながら本当のことを口にする。そして、何かに気がついたのか、少し伏せていた顔と皿線を上げて雲雀を見る。

『リボーン』という固有名詞に反応して「赤ん坊に……」と呟いていた雲雀はそれに気付き、「なに？」と顔を寄せせる。

「あ……、えっと。……ずっとここにたって……、見てたん、ですか？」

少し言ひのをためらい、雲雀の鋭い目つきに先を促されて身体を引きながら上目づかい氣味に答えた。

答えてしまってから馬鹿なことを言つたと後悔し、慌ててまた頭を下げる。

「「」みんなさい！そんなわけないですよね。馬鹿なこと言いました

咬み殺されるかもしれない。そんな思いにビクビクと震えながら、そつと皿を開ける。

思こに反して、雲雀は怒つていなければならなかった。  
手にトンフラーはないし、殺氣立つてもいい。

(いや、むしろ……、固まつてこる~)

いやでもそんなことはあり得ないよな、雲雀さんに限つてそんなこと、まさか図星だつたとか……、いやこやあり得ないありえないそんなことがあるわけない……。

そんなことをぐるぐるぐるぐる考えながら、雲雀に声をかけようと口を開く。

「あ

「なに言つてんの。そんなわけないでしょ。……委員たちに見張らせてたんだよ。テストになると図書室は群れだらけになるからね

声を発する前に雲雀にさえぎられた。

綱吉の口は「あ」の状態のままで固まつてこる。  
心配になつて声をかけようとしたことが急に馬鹿らしく感じられた。

綱吉は冷や汗をかいだ。

「あああー、や、うひすよねー」

田の前の雲雀を見てみる。何も変わらない。  
やっぱり固まつてこるよつて思えたのは、ただの勘違いだったのだ。

俺の質問が馬鹿らしくて、答えたがとつて出でこなかつただけだ  
る。

「えと、変な」<sup>ハラハラ</sup> ハーモンなやこ」

またまた頭をぺこりと下げる。  
行事のときの礼のように、二回、三回と数えて、みんなのときは  
つと頭を上げた。

「あの、じゃあこれで……」

失礼します、とぬいとしたとき、へ口の方から聞きなじみのある声と言葉が聴こえた。

「十代田 ハツー」

どちらに振り向くと、思つたとおりにジーナの所に獄寺と山本がいた。獄寺は嬉しそうに顔を輝かせて、こちらに大きく手を振つている。

同じように雲雀もどちらを見、その瞬間あたりの空気が変わる。ぞわっと鳥肌が立つような、総毛立つような、とにかく気分のいいものではない空氣。

綱吉は即座に硬直してしまった。このままでは咬み殺される。が、しかし、身体は言つこと聞いてくれない。

「遅いのよ、お迎えにあがりました」

やう言つて、まるでこの空氣に気づいていないかのようになパタパタとしつぽを振りながら駆けよつてくる。

山本も同じように、「遅いヤースナー」とぬいながら、こつもの笑顔で向かつてくる。

……いや、おやりぐれ本当に気が付いていないのだろう。

「……また群れてる

隣からかなりの怒氣を含んだ声が降ってきた。

綱吉は思わず、ひりつと縮みあがる。獄寺が雲雀を見つけて顔をしかめた。今にもつかみかかりそうだ。

硬直してしまっている喉を奮い立たせて声を出す。

「うー、獄寺君ー山本おーそもそも、そこまで待つてて、すぐに行くから」  
そう言つてから頭をもう一度下げ、一人の元へと急ぐ。  
一人にごめんね、と謝つてから向こうつを向かせると、その背をぐいぐいと押す。一刻も早くこの場から逃れたい。

「じゅ、十代目?」 「ツナ?どうしたんだ?」

何も分かつていない二人は、ツナの必死な様子に疑問符を飛ばす。

「いいからー」

叫ぶようにやう言つて、綱吉は何とか入口付近まで一人を押しした。  
自分もドアの前へと立ち、雲雀にもう一度礼と別れを言おうと振り返る。

「じゃあ、雲雀さん……」

そして、気づく。

雲雀はもはや、怒つてなどいなかつた。

いつも鋭く冷徹なまでの光を放つてゐる瞳はそこにはなく、なんといつたらよいのだろう。少し、柔らかい、といふのだろうか。少なくとも、群れていることに対する蔑みの光は浮かんでいた。

かつた。

どこか遠くを見つめるように、かすかに眉をよせて。

綱吉たちを見ているようで、どこかその先の遠くまで見ているようで、やはり綱吉たちを見ている。

まるで、羨む、ような。

何か眩しいものでも見つめているような。

(ああ、そうか)

それに気が附いた途端、綱吉は答えが分かつた。  
リボーンに出された宿題の答え。

一匹狼のもうひとつ意味。

リボーンの言葉の意味。

すべてがよつやく繋がった。

そしてふつと微笑む。何となく嬉しかった。  
答えを知ることができたのもある。だが、それだけではないことを、綱吉は分かっていた。

「十代田?」 「ツナ?」

振り返つたまま黙り込んでしまつた綱吉を不思議に思い、後ろの二人が訊いてくる。

ああ、「ごめん、と答えて、もう一度雲雀を見る。

雲雀は相変わらず、じらりを見ていた。

「……雲雀さん」

雲雀に向け、綱吉はゆづくつと話しかける。

雲雀がそれに気付き、なにへとも言ひよひに小さく眉をよせた。

「……狼つてね、群れの外から来た狼は、基本受け入れないんです」「急に始まつた話の意味が分からぬのか、雲雀は今度は怪訝そうに少し眉をよせた。

「でも、それでもたまに、その群れの中に自分たちとは違つ個体が混ざることもあるやうなんです。それに」

一度獄寺と山本を振り返り、やはり不思議そつに自分を見ている二人に苦笑しながら、綱吉は続ける。

「それに、俺たちは狼なんかじゃありません。『一匹狼』っていう言葉はただのたとえです。俺たちは追い出したりなんかしません。いつでも受け入れますから、好きな時に入つてください」

それから、ねつ、と言つて笑つ。

その言葉と笑顔に驚きを見せたあと、雲雀はふいと向ひつを向いてしまつた。

「それじゃ、失礼します。本、ありがとうございました」

行こう、と後ろの一人の声をかけ、一人の間に挟まれながら図書室から去つて行つた。

「……ふん」

夕陽に照らされ、顔を赤く染めた雲雀を残して。

「で、分かったのか？」

家に帰り、自室へと戻つて一息ついたところで、また唐突にリボーンが言った。

「ああ、うん。たぶん、だけど」

「そうか」

それだけ頷きながら言つと、リボーンはそのまま部屋を出て行こうとする。

「ちょっと、リボーン？」

「なんだ？」

慌てて綱吉が引きとめると、リボーンはやれやれと言つた様子で立ち止まり、振り向く。

「え……、えっと、訊かないの？」

「分かつたんだろ？なら、それでいい。訊かなくても分かるからな」

リボーンの答えを聞いて、綱吉はまだ納得がいかないことにうつよくな顔をしていたが、ふつゝと一つ息をつくと、まあいいか、とつぶやいた。

「じゃ、メシ食って行こう

といつりボーンの言葉に綱吉はうそ、といつながらく。

部屋を出ようとしたとき、ガハハハハーツ、といつものように大きな声で笑いながらランボが飛びついてきた。

「ツナお帰りーー！ 今日の晩、じまんはねーー、ママン特製のカレーだもんねー！」

嬉しそうに周りを飛び跳ねるランボに、綱吉はよかつたな、と言ひ。

早く早くとひっぱらわれるがままに、綱吉は慌てて階段を下りた。

命の危険も回避し、平和で騒がしい沢田家の一日が終わろうとしていた。

放課後の図書室。

最終下校の時間はとうに過ぎ、あたりがオレンジがら群青の世界、そして闇へと移り変わろうとしていること。もちろん生徒はほとん

ど残つてはいな。

そんな中、一人の生徒がぽつんと図書室にたたずんでいた。

窓際にある低い棚に乗り、片膝を立てて座つている。  
学ランを肩だけに羽織り、その袖には『風紀』と書かれた腕章が  
付いている。

目線の先は窓に向ひ。

誰も残つていらないグラウンドのさらに向こうへ。  
おそらく、自分でもどこを見ているのか分かつていらないのだろう。  
ただじつと、どこか遠く、もしかしたらすごく近い場所を見据え  
る。

「……何を勘違いしてんんだか」

黒い影が、一つづぶやいた。

### 『一匹狼』

意味：群れに入りたいのに入るのできな狼の姿から、集団  
に入りたいと思っているのに入らない、意地つ張りの淋しがり屋。

(確かに雲雀さん、そのままだよなー)

スプーンでカレーを掬いながら、綱吉は図書室での雲雀を思い出し、笑いながら呟ついた。

(後書き)

この解釈は私が勝手に考えたものです。参考になんて絶対にしないでください。間違つても学校の先生に説明なんてしないでくださいよー。

あ、でも狼の生態については本当です。ちゃんと調べました。

ほんとはもつと赤面な雲雀とか入れたかったんですけど、原作に近い性格にしようと、あんなもんにしました。

なんかもうじつぱに詰め込みすぎて、何がなにやらわからない状態なんですが……、もしナーニコレってのがあれば感想等でお教えてください。

ちなみに雲雀の「何勘違いしてんんだか」は、「僕は別にボンゴ<sup>きみたち</sup>レの中に入りたいわけじゃなくて君と一緒にいたいんだよ」的な……／＼。ああもう何これ！ 雲雀がツナラブ過ぎて恥ずかしいよ。

実はこの話、前作の「ひとりぼっちの運命」を書き終えた時から書き始めてました。書き終えるまでどんだけ時間かかってんだってね……。

少しいいわけ。

ツナの教室の位置とか席の場所とか分かつていません。ついでに三階なんて高い場所にいる人の顔が見れるんだとかは見逃してください。画面の前で突っ込んでください。

リボーンや日本やランボのしゃべり方なんて知ったこっちゃありません。

ツナが図書室で何をしていたとかいちいち報告せせるのかよ、とか思う方がいらっしゃるかもしれません、アレはウソですので。雲

雀はずっと見てました。（マジで！？）

夕食と言えばカレーしか思い浮かびませんでした。“めんなさい。

謝ります。

長々と乱文で失礼します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8822d/>

---

一匹狼

2010年10月21日20時39分発行